

図1 雑誌『LOGiN』1985年3月号より

ち よつと前まで④のマークの意味が良く理解できずに困っていたのですが、あるTVで知りました。それなのに、また私の知らない新しいマーク⑤がLOGiNに載っていて、もうお姉さんは、ついていけそうもありません!

(山口県 堀ゆかり)

そんなこたないのだ。あの④には特別ふかーい④があるわけではないのである。お姉さんがついていけないなんてことは、絶対ないのだ。

たとえば、⑤の親戚の①や②だった、ほんとーに特別な③や④があるわけではないんですよ。渡辺和博センセイの⑥や⑦は、それだけで立派な意味を表わしているのだが(そう、人間をそのマークでたった2つの種類に分けてしまふ)、⑧や⑨や⑩はそーではない。⑪や⑫や⑬は、それなりに意味を持っているが、⑭や⑮や⑯はやっぱりそーではない。

実際、⑰は⑱と⑲を呼んで、ぼくたちは一体なんなんだー!! と会議をし、写真植字各書体記号連絡会(一般にしていたげられた書体記号たちが不満を言いたうために作られた連絡会)にかけたが、前向きに善処するとゆー回答を得ただけと、ログインおたよりコーナーでは聞いている。で、陽のあたらぬ記号である⑳や㉑や㉒にも、活躍の場をあたえようと、ログインは思うわけなのです。

だから、お姉さん。ついていけない、なんてほど考え込まなくてもいいのですよ㉓。ほんとーに㉔。最終はリッチな記号で決めてみました。

記号の編集者

別ウィンドウの自分の文章中にペーストする。気に入った文章や表現があれば、一から打ち直すのではなく、ちよちよいとコピーして手直しする方が、はるかに簡単だし、写し間違いも起こらない。

この「コピーによる拡散流通」という特徴が、WEBにおける日本語表現の発展を、かなり特異な形で促進したのも事実である。すなわち、コピーできないような表現は、そもそもWEBでは流行しない。一方、日本語マールチウィンドウシステムにおいては、現在でこそ表示できる文字はほぼ全てコピー可能となっているが、一昔前は必ずしもそうではなかった。確実にコピーできるのは、シフトJISに収録されている文字だけ、という状況が、二〇世紀末から一昨年くらいまで(ことによると

現在も)続いてきたのである。

シフトJISは一九八〇年代に開発された文字コードであり、現代の文字コードに比べると、収録文字数は極めて少ない。漢字は六三〇〇字ほど収録されているが、記号は一五〇字そこそこである。しかもその一五〇字の中身たるや、句点、読点、感嘆符、疑問符、カッコ類、あるいは数学記号などの、どちらかといえば無味乾燥な記号ばかりである。♥や⑳すら、シフトJISには含まれておらず、豊かな日本語表現を実現するにはほど遠かった。

もちろん当時においても、シフトJISに制限されない局面においては、コンピュータ周辺で用いられる日本語表現には、すでに多種多様な記号や絵文字が用いられていた。たとえば、コンピュータ雑誌の記事(図1)に

特集 記号と 絵文字・顔文字

WEBの記号・絵文字・顔文字

安岡 孝一

本誌一九九三年一二月号に「パソコン通信におけるフェイスマークの機能」(高本條治)が掲載されてから、一八年が過ぎた。この一八年の間に、コンピュータによるコミュニケーションの中心は、パソコン通信からワールドワイドウェブ(以下、WEB)に移行し、結果として日本語の書き言葉の多くが、WEBを経由して拡散流通するようになった。それは、日本語にどのような変化をもたらし、あるいはもたらしつつあるのか。

WEBにおける日本語の第一の特徴は、横書きが圧倒的に多いという点だ。もちろんWEBにも、CSS3等の縦書き技術があるのだが、そのような技術を駆使したページは現時点ではほとんど普及しておらず、やはり圧倒的に横

書き文化である。その結果、WEBの黎明期において、横書き特有の顔文字である(∧やφ、)等の表現が、パソコン通信や電子メールからWEBに流入してきた。マンガのフキダシなど縦書きの日本語表現には、このような顔文字の流入があまり起こらなかったのと対照的である。

WEBにおける日本語の第二の特徴は、新たな表現の拡散流通が、コピー(コピー&ペースト)によっておこなわれるという点だ。コンピュータにおけるマルチウィンドウシステムとポインティングデバイスの発展は、他者の文章を引用(あるいは拝借)する手間を、かなりドラスティックに軽減してしまった。あるウィンドウに表示された他者の文章をマウスで選択してコピーし、それを

図2 「書院 WD-A551」(1991年11月発売)の文字コード表

01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

図4 アスキーアート「やる夫」

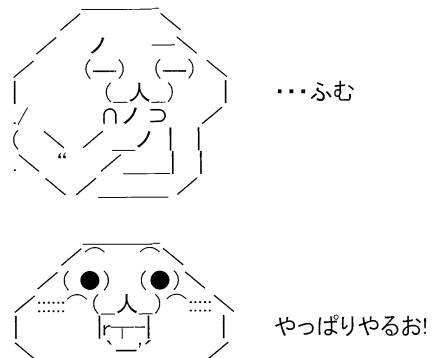
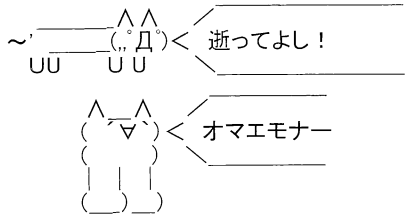


図3 アスキーアート「ギコ猫」(上)と「モナー」(下)



は、いわゆる写植記号が多用されていたし、日本語ワープロの文字コード(図2)には、年賀状やチラシに使うための絵文字が大量に収録されていた。しかし、WEBでそのような写植記号や絵文字を表示しようとしても、文字化けしてしまつて全く読めないか、あるいは表示できたとしてもシフトJISの制限でコピペできない、というのが、二〇世紀末頃のWEBにおける現実だったのである。それに加え、二一世紀初頭に一世を風靡した電子掲示板(BBS)においても、文字コードにシフトJISを採用しているものが大勢だった。

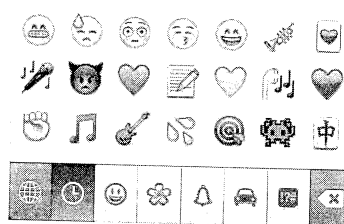
雑誌記事や日本語ワープロなどの紙媒体で可能な日本語表現は、もちろんWEBにおいても実現される必要があった。文章を書く者は、必ずしもその媒体を限定していないからである。しかし、写植記号や絵文字は、シフトJISの制限により使用できなかった。HTMLで書かれた文章中に、文字と同じ大きさの画像を貼り込む、という手法も試されたが、あまり流行しなかった。画像を含む文章は、コピペできないからである。そのような中、シフトJISの文字を組み合わせた顔文字や絵文字、あるいはアスキーアートが、確実にWEBを席巻していった。

WEBにおけるアスキーアートは、電子掲示板と呼ば

れる日本語環境において、かなり特異な発展を遂げた。そもそも、文字コード名のアスキー(ASCII, American Standard Code for Information Interchange)をその名に冠しているにも関わらず、日本のアスキーアートのほとんどは、シフトJISの文字の組み合わせによる絵画表現である。電子掲示板の多くが、日本語の文字コードとして、シフトJISを採用していたからだ。しかも、日本におけるアスキーアート(あるいはシフトJISアートと呼ぶべきかもしれない)は、観賞用などでは決してなく、あくまで文章中に用いることが前提となつており、右側に短文を付加する用法が一般的である。短文は、フキダシとして囲まれている場合(図3)もあるし、そうでない場合(図4)もあるが、筆者の見たところでは、最近のものほどフキダシを省く傾向にあるようだ。

ただし、アスキーアートは、WEBでの使用が徐々に廃れつつある。アスキーアートのデザインは、表示に用いるフォントのメトリック(特に文字幅)に強く依存しており、フォントを変更するといわゆる段ズレが起こってしまう(図5)。WEBブラウザ用のフォントがMS Pゴシックばかりだった時代ならいざ知らず、現在ではメイリオやヒラギノなどのフォントも一般に使われており、段ズレが常態化しつつあるのだ。また、電子掲示板

図14 iPad/iPhoneの絵文字キーボード



が読みにくいからに他ならない。丸カッコに囲まれたいくつかの記号を顔文字とみなす、という合意が、日本語WEBでは既に出来上がっているのに対し、絵文字にはそういう合意がないからだ。

とところが最近になって、ソフトJISに限定されてきたはずの日本語WEBの絵文字に、大きな変化が起こりつつある。iPadの台頭だ。iPhoneとの互換性を重視したiPadは、いわゆるケータイ絵文字をユニコードで収録している。しかもiPad/iPhoneの絵文字はカラーであり、専用の絵文字キーボードまで準備されている(図14)。ツイッターやフェイスブックは、元々ユニコードで動いており、これらの絵文字も入出力可能である。この結果、iPadのカラー絵文字が、ツイッターやフェイスブックを中心に、日本語WEB上で徐々に増殖しつつあるのだ。

iPadのカラー絵文字は、これまでの日本語WEBで使われてきたような複数の文字の組み合わせではな

く、一文字がそのまま絵文字になっている。その意味では、いわゆるケータイ絵文字と同じ考え方だ。また、iPadの絵文字がカラー化されているのは、見栄えのためだけではなく、カラーでしか判別できない絵文字を収録する必要があったからである。その一つが国旗の絵文字だ。卑近な例を挙げるなら、イタリアの国旗とフランスの国旗は、どう考えてもモノクロでは見分けがつかない。極端な話「今晩は🇯🇵じゃなくて🇯🇵よね🇯🇵」という文は、レストランの話だという文脈が分かったとしても、モノクロでは理解が困難だ。それゆえiPadは、絵文字をカラー化するという大胆な手法をWEBに持ち込んだわけである。

この結果、日本語WEBにおいては、これまでに使われてきたソフトJISの顔文字や絵文字に加え、新たにiPadのカラー絵文字が使われるようになった。ただしこれは、近い将来どちらかが勝利する、というようなものではなく、ソフトJISの顔文字とiPadのカラー絵文字とが、今後もゆるやかに共存していくと思われる。と言うのも、新しく書かれたWEBページには新しい表現が用いられるが、過去に書かれたWEBページには古い表現がそのまま残っているからだ。WEB開始から二〇年余、その間に蓄積されたソフトJISの顔文

字は、そう簡単に消えてしまっようなものではないのだ。

文献

- 高本條治(一九九三)「パソコン通信におけるフェイスマークの機能」『日本語学』第一二巻第一三三号
- 上北基史(二〇〇二)「携帯絵文字メールは日本語か」『筑波フォーラム』第六一三三号
- 安岡孝一(二〇〇四)「顔文字は文字なのか」『漢字と文化』第三号
- 原田登美(二〇〇四)「顔文字による日本語の円滑なコミュニケーション」『言語と文化』第八号
- 鈴木晃二(二〇〇七)「顔文字の歴史について」『明解日本語』第一二二号
- 安岡孝一(二〇〇七)「ケータイの絵文字と文字コード」『情報管理』第五〇巻第二号
- 川上正浩(二〇〇八)「顔文字が表す感情と強調に関するデータベース」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』第七号
- 萩原正人・水野貴明(二〇一〇)「モバイル検索システムのための絵文字に対する意味解析」言語処理学会第一六回年次大会
- 岡田翔平(二〇一〇)「2ちゃんねるに見られる顔文字について」『比較民俗研究』第二四号
- (やすおか・こういち 京都大学人文科学研究所准教授)

日本語学 vol.31-2 Nihongogaku

2月号 第31巻第2号 通巻第390号
 平成24年2月10日 発行
 編集兼発行人 三 樹 敏
 印刷者 西村 正彦
 発行者 株式会社 明治書院
 〒169-0072 東京都新宿区大久保1-1-7
 電話 03(5292)0117 (代表)
 電振替 00130-7-4991 番
 ホームページ http://www.meijishoin.co.jp
 Eメール nihongogaku@meijishoin.co.jp
 ©株式会社 明治書院
 2012 Meijishoin Co.,Ltd.

◆編集後記

ついにWEB上で使われる言語として日本語が37%を占め、世界一になった。世界共通語とされる英語を抜いたのには驚かされる。どうやら日本人は「書く」「読む」ことが大好きなようだ。世界中で最も複雑な文字体系を持ちながら、それを使いこなし、膨大な情報のやり取りをする。「書く」「読む」ことが嫌いなら、こうはいかない。(K)